

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3337714 649 FAX(03)3299153 67
振替 〇〇一〇〇一四一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「被告小泉純一郎は「憲法違反」

滝野 忠……………2

労働者の大多数は「春討」の枠外

橘 幸英……………3

―04春闘総括の視点 何がとわれているのか―

四・一三集会に三千五百人……………5

―飛躍への土台はできた!―

国家、そして憲法改悪(一)……………6

戦争とは何かを考える……………9

―平和を訴える―

韓国総選挙で民主労働党が議席……………12

元気の出る集会になった!……………13

―兵庫から労働組合を作りなおす―

兵庫の「労働者大会」へ……………15

―労働運動をめぐる情勢と課題―

三・一三集会「基調」……………

読者からのおたより……………18

誌代値上げのお願い……………14

旬刊 社会通信

NO. 900

二〇〇四年五月一日合併号

二〇〇四年五月一日発行
(毎月一日・二日・二二日三回発行)

被告小泉純一郎は「憲法違反」

中国の温家宝首相は三月十四日、靖国神社参拝について次のように述べました。

「対日関係の主要な問題は、日本のある指導者がA級戦犯をまつる靖国神社を何度も参拝し、中国とアジアの人民の感情を傷つけていることだ。中国で被害を受けたのは一つ二つの家庭ではない。死者は二千万以上いる。」

日本の指導者は三つの文書（日中共同声明、日中平和友好条約、日中共同宣言）を謹んで守り、歴史を鑑（かがみ）とし、未来に向かうべきであり、再び中国人民の感情を傷つけたら、両国指導者の相互訪問や両国関係の発展に影響を与えたりしてはならない」

「日本のある指導者」とは小泉首相であることは明らかです。温首相は名指しこそ避けましたが、一国の指導者としてはきわめて厳しく、小泉首相の靖国神社参拝が日中の外交に大きな影響を与えていることを警告したのです。温首相の警告にたいする小泉首相の返答はたいへんに異常なものでした。小泉首相は三月十九日にこう話しました。

「さまざまな分野で交流が進んでいる。私の訪問を中国が望まないときに私は行く必要がない。それでも日中友好を進めていく方針に変わりはない」

なんとという不尊な発言でしようか。靖国参拝でいちゃもんをつけているのは中国だ。おれはちっとも悪いこととは思っていない。中国の言動は独断にすぎないのです。

靖国神社参拝問題で四月七日激震が起きました。小泉首相の靖国神社参拝について、「首相の参拝は神道方式のおはらいを受けるなど憲法が禁じる宗教活動。国内外の批判も無視して強行し、信教の自由を侵害した」として、「首相と国に一人あたり十百万円の損害賠償」を求めた裁判で、福岡地裁が「靖国参拝は憲法違反」との判決を出したことです。

判決は被告小泉純一郎は①公用車使用、②秘書官随行、③「内閣総理大臣小泉純一郎」と記帳、④「献花内閣総理大臣小泉純一郎」との名札を付し献花、⑤参拝後、内閣総理大臣である小泉純一郎が参拝と述べていることは、「社会通念に従って客観的に判断すると、憲法二〇条三項で禁止されている宗教活動に当たり、同条項に反する」と結論したのです。

日本では明治維新後神道が国の宗教とされ、国民は「神」を敬うことが強制されました。その中心が靖国神社で、戦争政策推進の支柱とされたのでした。第二次世界大戦後、靖国神社は国家から切り離されました。自民党の有力者にとっては、靖国神社は天皇とともに日本の「歴史・伝統・文化」の重要な一環をなし、靖国神社参拝をくり返してきました。とりわけ重大なことは一九七〇年代後半、靖国神社にA級戦犯をまつていることが明らかにになったことで、「歴史問題」として、朝鮮半島の国ぐに、中国との外交問題の大きな政治課題になったのです。にもかかわらず被告小泉は「日本人が靖国神社に参拝してどうしていけないのかわからない」と強弁します。小泉の心情を代弁したのは石原都知事です。彼は「この裁判官、文化つてもものがわからないねと、日本の歴史・伝統に重きをおき憲法に「歴史的正当性はない。あんなものは」と述べていることです。

憲法を「あんなもの」とはなんといい言い草でしょうか。被告小泉に思考能力はありません。己の思いを断片的にぶつけるだけです。それにたいし、都知事石原は「物書き」で、被告小泉に足りないものを、「加筆」していると考えれば分かりやすい。

（滝野 忠）

労働者の大多数は「春討」の枠外

—04春闘総括の視点 何がとわれているのか—

春闘の文字にカギ括弧か、“ ” をつけたくなるのは私だけではないであろう。マスコミもからかい半分である。「去年、『03春 賃金・雇用』とし『春闘』をやめた『朝日』はなぜか『04春闘』に戻ったが、日経は『04春 賃金・雇用』に、産経は『春闘』『変わる賃金雇用』に、読売、毎日『春闘』のまま。労働組合が雇用優先の名の下に賃上げ要求そのものを自粛する」時世となり、春の『闘い』が体をなさなかったことが背景にある。云々」(『選択』三月号) という調子である。日本経団連は「春討」は大いに意義があると…。

賃金体系維持は賃上げか まずは、連合の中心、IMF・JC(金属労協)加盟の金属大手の回答を見てみたい。(例によってこの回答だけではわからない部分が隠されているのであるが。)一兆円を超える史上最高の利益を上げながら「国内工場の雇用を守るため」という屁理屈をつけて、日本経団連が主張した「総人件費抑制」・「ベース・アップは論外、業績向上分は一時金で」のお先棒を担ぎ、労使協調を身上とする連合幹部すら驚いた(あきれた)? というが、ベア要求をしないだけではなく業績向上分としての一時金要求も昨年よりなんと二万円下げて要求したトヨタ自動車労使がすべての流れを決めてしまった。

さて、そのトヨタ自動車が賃上げ六五〇〇円とある。いわゆる賃金体系維持分だという。(日本経団連発行の「経営タイムス」編集部の説明。)仮に月三〇万円とすれば定昇分は二%とされているから六〇〇〇円、原資とすればそんなところであろうが、「要求しないで賃上げ、それも六五〇〇円も?」ということである。トヨタでさえベアアップせずのニュースを流し続けたマスコミは何の説明もなしに「賃上げ六五〇〇円」と書いて平然としている。もちろん配分は平等ではないから誰でも六五〇〇円の賃上げということではないが。ここ数年、民間大手企業労組からベア要求は消えた。要求しているのは定昇制度のない私鉄総連や全国一般など主として旧総評系の少数である。しかし、「あのトヨタでさえベア要求なし、一時金二万円ダウン要求」は強烈なアナウンス効果を生み出した。世間一般の受け止め方はベアと定昇は違うとか同じだとか、また定昇があるとかないとかまで関心を持たない。

組合のいわゆる「賃金屋」役員は賃金カーブ維持は当然と理解しているが、一般的にはそんな知識もないから「ベア要求せず」はトヨタの労働組合は「今年と同じ賃金で結構とあった」というのが大方の受け止め方であつたらう。ひどいとは思いつつ、ましてやトヨタの奥田会長が会長をつとめる日本経団連は、「ベースダウンもありえる」と脅かしているからなおさらである。組合幹部でなく、組合員であると否を問わず「仕方がないか」という状況をつくりだした。

もう一つ驚く事がある。「交渉せず」に賃金体系維持分と一時金に「回答」が出ている。いったい全体労働組合の役員は何をしているのだろうか、しかも中には昨年も「交渉せず」というところがある。石川島播磨重工にいたっては一時金が六万円減っただけではない。「交渉せず、にこの四月から二年間、年収の一〇%削減に『合意』(四月二日『日経』)したという。こうした流れは関連企業の労働者にもろにはねかえるだけでなく、定昇制度が

ない多くの中小零細企業に働く労働者に深刻な影響を及ぼすことになる。文字通りの「ゼロ」になってしまふからだが、そこには下請けという立場が重くのしかかってくる。四月いっぱいでは終わらない組合もあると思われるが苦闘が続く。

労資トップはともに礼賛 日本経団連の奥田会長は三月二二日、記者会見で「各社が自社の業績や実績を踏まえ判断した結果」、「雇用延長や出産時休暇など賃金以外の労働条件等も労使間で協議していることは歓迎すべきこと」、「春季だけでなく年に数回、労使で話し合うようになればよい」とご満悦である。一方、笹森連合会長も一時金が「目標がほぼ一〇〇%近い形で解決」、「賃下げは労働者の努力で完全に阻止できた」と、労使協調メデタシメデタシ。リストラにおびえ、首を切られ苦しんでいる我われ下じものことはほとんど構いなしである。

大企業の正規労働者は減り続け、不安定労働者は増える一方、残った正規労働者の労働条件は一方的に切り下げられている。『年収三〇〇万円時代を生き抜く経済学』（森永卓郎著）がバカ売れという。

かれん誅求の時代 最近の新聞からひろってみよう。三月二九日、『日経』であるが「きしむ生活、増加続く（生活）保護費」とある。最高裁がまとめた03年度の個人の自己破産申し立ては約二十四万二千件（速報値）で昨年比一三%増、この五年間一貫して増加。生活、医療扶助などの生活保護の件数も増加の一途、人口千人あたりの生活保護を受けている人の数を表わす保護率は全国平均九・八（〇二年度）、増加に歯止めがかからない。大都市の中では最も高い大阪市が三一・三、旭川市も三〇に近く〇四年度予算案の一般会計の一割を超えそう義務的経費増加の一因という。

これまでの経験則からは最後に生活保護に行きつく、そして景気回復から三年ないし四年近く経過しないと保護率は改善しないというが、昨今ようやく大企業に景気回復の兆し、中小企業、地方はまだまだこれから語られるが、すでに「今がピーク、来年は大底」（四月二日『読売』）という解説が出る始末である。

一方、「広く薄く」、「誰もが負担する」消費税は〇二年度「国庫歳入歳出状況」によれば九兆八一一一億三七五六万円、なんと一般会計の歳入のうち「租税及び印紙収入」四三兆八三三二億五一七万円の実に二二・三八%にもなる。

学習そして激励 表題に即して言えば、ここまで労働組合が何もしなくなってしまうたら「春闘の総括」ということ自体が空しい響きを持つが、中小、零細の組合は必死の思いでたたかっているし、圧倒的多くの働く人々は未組織であり「春闘」であれ「春討」の枠の外にいる。そして資本の側の攻撃が全面的であるから文字通りあらゆるところに矛盾が吹き出してきている。

春に限らない。一つ一つの怒り、不満を皆で語り確認し解決のためにどうするのか、交流を深め仲間と共にたたかうことからしか始まらないのではないか。もう一つ、わが労働運動センターの活動の柱のひとつ、学習活動の活発化、お互いの激励が大切なことである。

四・一三集會に三千五百人

— 飛躍への土台はできた! —

先進的とりくみを全国へ 国鉄共闘會議に集う東京・西部の共闘會議（新宿・中野・杉並・渋谷・世田谷で構成）は、一〇四七名の一致団結、したがって党派とイデオロギーを異にする三つの組合の一致協同こそ勝利の鍵と、さまざまな活動にとりくんできた。西部地区の運動はじつに楽しく、活発だ。組織だから、組織で動く。しかし、組織の構成員は発想豊かで自由自在に行動する。その魅力に引かれ、編集子は心楽しく行動を共にしている。

西部地区は「人らしく」上映運動に五百人を集め、独自の団結まつりに一万名を集めた。西部でこれだけのことができるのだから、東京ではこれに数倍の活動が可能と、「国鉄闘争は十七年間もたたかい続けた。中途半端で終わるわけには行かない」と提起されたのが「大きな集會やりたいね」との四月十三日の集會だった。

国労闘争団には礼を失するかもしれないが、闘いの大きさと少ない専従者で次から次への日程―鉄建公団裁判だつて月一回―をこなすのに大変な努力を要し、詳細な戦略・戦術を予定する余裕は十分ではない。国労闘争団、とりわけ鉄建公団裁判原告団の気持ちをもつともよく理解する西部の仲間が、一〇四七名の仲間が本当に、心から寄り集まらないといい解決にはならないよ、と提起し実行したのがこの集會だった。

鉄建公団裁判が焦点 この集會の背景にはこのほかに国労が「おれたちだけの解決でいい」と強引にとり結んだいわゆる「四党合意」の破たん、それに昨年十二月の最高裁敗訴があった。最高裁は三対二で国労に敗けを宣した。しかし、「JRに法的責任はないけれど、不当労働行為はあった。所在者は旧国鉄、それを引き継ぐ鉄建公団」と明記した。

この判決で、国労闘争団有志が起こしていた鉄建公団訴訟が存在感を増した。最高裁判決は負けではない、勝てる道筋を逆に示したと、四・一三集會へのハズミがついた。

全都をくまなくオルグ 国鉄闘争は国を相手にするたたかいは拡まりが小さすぎる。全都、全国に元氣と勇氣を与える集會を組織しなくてはと、国鉄闘争勝利で労働運動再生、政治の翼賛体制阻止で心を一つにした仲間が集會成功に全都を駆けめぐった。行政区単位の組織の結成にまず力が注がれた。それを基礎にブロック（東京には東部、西部、南部、中部、北部の都区部と三多摩）の組織づくりと連携がめざされ、それとともに四国共闘（四国四県の統合体）と質を同じくする東京連絡会の結集が目ざされた。

四月十三日の集會に「おれたちはこれだけ集める」と、楽しい競争がおこなわれ、地域、ブロックからの集會が積み重ねられていった。この時点で、四月十三日の集會の成功はほぼ確信された。いろんな人がオルグに回った所は千ヶ所ちかくにのぼる。国鉄闘争始まって以来の訴えである。集會地、日比谷公会堂は人いきれにあふれた。主催者は当初、三千の資料を用意した。これが足りなくなり五百を急ぎよ刷り増し。ほとんど残部もなかったとのことであるから、三千をはるかに超える国鉄支援者が会した！ 次の一歩への大きな布石は固められた。

加藤弁護士報告に勇氣 今集會の特徴はナショナルセンター、思想信条の違いをこえ、国

鉄労働者一〇四七人の解雇撤回とILO勧告がいう「当事者が満足する解決」を求め、総結集したことである。呼びかけ人を代表してあいさつした経済学者の伊藤誠氏が、二つを實現することこそ「日本の未来、労働運動を切り拓く力になる」と激励したことにそれは示される。

もう一つの特徴はこれまで国労、全動労（現建交労）、千葉動労の三つの組織に別れバラバラにたたかってきたこれら三つの「闘い」の当事者たちが一同に会し、一〇四七人の一致団結を示し訴えたことである。

集会のハイライトは鉄建公団訴訟主任弁護士を務める加藤晋介氏の講演「今後の裁判闘争の展望」だった。氏は①国鉄闘争の性格、②国鉄闘争一七年の推移、③現局面の特徴と鉄建公団訴訟の意義、④これからの展望について語り、全動労、千葉動労に鉄建公団訴訟を訴えた。

なお集会アピールは①国鉄闘争の勝利は憲法改悪阻止に結びつきたたかであり政党、ナショナルセンター、労働組合、イデオロギーの違いをこえて一丸となつてたたかうべき課題、②今日の力を背景に解雇された当事者のさらなる団結と共同行動を柱に、今度こそ早期解決に向けた一〇四七名の解決要求を政府・JRにつきつけ、解決交渉に臨まざるをえない状況をつくりだそう、③〇四年の今年こそ、国鉄闘争勝利の展望を切り拓いていこうと呼びかけている。

この集会には東京、関東近辺だけでなく、全国からも集まった。四国の仲間たちはなんとマイクロバスで駆けつけた！ 十二時間余も要してである。こんな努力が全国で積み重ねられている。四月十三日集会大成功をバネにさらに大きな結集をつくり上げていこう！

国家、そして憲法改悪（一）

二つの裁判

議論されることがほとんどなくなったが、「国家とはなにか」を改めて考えなくてはならない時節が到来したようである。ロシア大十月革命の指導者レーニンは、革命的高揚期、社会主義政権樹立に備え、ブルジョア国家に対比しプロレタリアートの国家とはいかなるものでなければならぬかを、マルクスとエンゲルスの著作、とりわけ『フランスの内乱』（パリ・コミューンの総括）、『家族・私有財産・国家の起源』（文明社会の階級支配のあり方、とりわけブルジョア民主共和制について）を考察し、『国家と革命』を著した。これは理論の書であるとともに、社会主義をめざし、社会主義社会における国家、政治のあり方を説いた実践の書である。

現在、われわれに問われているのは、ブルジョア民主共和政の一形態である議会制民主主義とはいかなるものをかを再度考えてみることだ。民主共和政は三権分立（国会、行政、司法）、とりわけ司法の「中立性」を強調する。司法裁判が「中立」だって？！ ふざけんじやねえ、司法ほど権力に忠実な機構はない。国会と行政を「守る」番犬というのがその役割だ。

昨年末、司法の大御所最高裁は二つの大きな事件で判決をだした。一つは国鉄の千四十七人解雇事件、もう一つは選挙での一票の格差をめぐる問題である。国鉄事件には最高裁

前に駆けつけた。結果はすでに予想されたことで、関心はどんな判決内容になるかであった。最高裁に入廷した当事者たちはたった五分で退廷させられた。

「原告の申し立てを棄却する」との一言で、裁判は終わったと聞いた。これが司法、裁判所の現実、階級性なのだ。国は法を定める、定めた法を守りぬくのが裁判所であることを事実で示した一駒である。

裁判官は五人で三人は東京地裁・高裁の判決を支持したが、あとの二人は異議を唱え、JR会社に責任の判断を下した。「裁判官、裁判所も捨てたもんじやない。三対二に別れたことは反撃のチャンス」との言論が渦巻いた。判決からすでに三ヶ月を経た今でもそうである。

思い起こされるのが、すでに五年も前になる東京地裁の判決の時である。この時も東京地裁前にいた。東京地裁判決前夜、「かならず勝つ！勝てる！」の雰囲気の高さに驚かされつづけていた。この時、「国鉄分民は国の最重要施策」と、この施策を実行した中曽根は大勲位として政界に君臨し、大勲位の下でゾウキンがけしていた橋本、三塚は政界の頂点に登りつめた。他方、国鉄三馬鹿トリオといわれ、約三十万人の国鉄労働者を職場から追い出した人物どもは本州三社の最高位にあった。国労は「国家的不当行為」と国鉄事件を規定し闘った。「裁判で本当に勝てるのか」が持論だったが、そんなことを言える雰囲気ではなかった。「勝てる！」と前夜、祝杯をあげたという信じられない話すら耳にしていたからだ。

国家は幾重にも「武装」している。なぜなら、国家は歴史的に文明社会の発展のなかで、階級対立を制御する必要から、同時に階級の抗争のただなかで生じたのであるから、国家は一般的にもっとも有力な、経済的に支配する階級の国家である。マルクス・エンゲルスは、このことを『共産党宣言』で、すでに百五十年余も前に「近代の国家権力は、全ブルジョア階級の共同事務を処理する委員会にすぎない」とカッ破したのである。

一票の格差をめぐる裁判も同じだ。こちらは大法廷（十五人の裁判官）でおこなわれたが原告五対被告十に判断は別れ、結論は「合憲」となった。

民主共和政とは

労働者は「国家の階級性」について無頓着だ。日々生活が国家の本性をあらわにしてくれているというのである。政府報道を鵜呑みで伝え、今や政府公報紙と化した巨大マスコミ。労働者生活はリストラ、賃下げ、競争原理一本槍の労務管理、経営施策で己の身を守るのに精一杯。「国家」なんて考える気力も時間もない、というのである。しかし、国家を現在の階級支配、とりわけ経済支配―搾取―の道具にしたいとする資本家階級は国家を「支配の道具」にすることに余念なく、躍起となる。

民主的共和政とは何か。エンゲルスはこう述べる。重要な指摘で、労働者ならだれでも深刻、慎重、怒りをもって考えなければならぬことだ。とりわけ、国と闘い続けると国家Ⅱ鉄建公団に地位確認、損害賠償を求める国労闘争団、国労組合員にとつては、首切り勝利するにはきわめて重要である。エンゲルスは述べる。

「歴史上の大部分の国家では、国民に認められる諸権利は財産による等級づけをうけ、これによって、国家の有産階級の、無産階級にたいする防衛のための組織であることが、直接に表現されるのである。」

このような財産上の区別の政治上での承認はけつして本質的なものではない。逆に、それは国家の発展の低次の段階を表している。最高の国家形態である民主共和政は、われわれの近代的社会関係のもとではますます避けがたい必然となりつつあり、またこの国家形態のもとでのみ、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの最後の決戦も闘いぬかれるのであるが、—この民主的共和政は、公式にはもはや財産上の区別をまるで問題にしない。そこでは、富はその力を間接的に、しかしそれだけにいっそう確実に行使する。一方では、直接の官吏買収の形で。他方では、政府と取引所の提携の形で。」

ソ連が権力基盤であった共産党をみずから解体するという自己崩壊—その教訓から中国は共産党が資本主義発展の原動力となる「社会主義市場経済」を選択し、朝鮮民主主義人民共和国は「戦時共産主義」政策をますます強めている—を経た世界は民主的共和政しかないが政治論となり、現代世界の主導国家であるアメリカ流の政治と経済が世界を包摂している。アメリカ流の「自由と民主主義」政治はアフガン、イラク、パレスチナを中心とする中東問題ですでに破綻している。そうであるだけに、民主的共和政の矛盾が指摘されねばならないのだが、逆に民主的共和政内での法律論が人気を得ているようだ。

エンゲルスはさらにこう述べている。

「有産階級は普通選挙権をつうじて直接に支配する」。

ブルジョア民主共和政下では選挙なしに夜も日も明けることはない。選挙が民主主義だ。資本主義は民主主義とどう両立するか。ここでもやはり資本の全能を間接に実現することによってである。このための経済的手段は二つである。第一は直接の買収、第二は政府と取引所の同盟。

国家、国家権力とは

国家権力と国家権力に庇護される支配の側にたつ輩は、「国家の本質」について多くを語らない。小沢一郎君は「ふつうの国」といい、行政改革会議では小説家・司馬遼太郎の造語である「この国のかたち」と、誠にナイーブに、抽象的に表現する。ちやうど「愛国心」を「国を愛する心」というようにである。

国家とはなにかを支配する者の立場から、はっきりと鮮明に、しかもわかりやすく簡潔に語ってくれたことがあった。もう三十年ちかく前の一九七六年、当時財界の長老で日経連会長だった桜田武が、政界のドン・田中角栄逮捕に揺れる政治の安定策を述べてみせた時だ。桜田の言とはこうだ。

「…一九三〇年頃、ドイツ・ヒトラー出現前の様な小党分裂に陥ることは議会政治の終焉であることを警戒すべきであります。我々は日本人の優秀性を信じて待つ心積もりです。ところが政治が混乱している間の日本には安定帯がなければなりません。私は企業の職場を中心とする労資が安定帯となり得ると信じます。昭和二〇年初頭から敗戦後の一両年に経験したところであります。それに警察、裁判所が健全であり所要の官僚組織が健在であれば、政治の混乱は案外経過出来ると信ずるものです。」

政治が動揺している時に大事なものは警察、裁判所、官僚組織。これらがしつかりしてくれば危機は乗り切れるというのだ。桜田は国会に代表される政治権力、裁判所という司法制度、官僚という行政機構は「三位一体」で権力を構成すると口をすべらせた！。

現代世界には百九十二の国がある。領域で国民が分断、区分される。それが国家の第一の特徴である。経済のグローバル化で国境は消えてなくなるかの論調もある。しかし、現実には経済的に統合しようとするFTA（自由貿易協定）交渉にみられるように、国境は経済的に解消の傾向を強めながら、国家の論理はさらに強くなる様相を呈している。（WTOの交渉は中断につぐ中断をつづけている！）

国家の第二の特徴は、公権力の存在である。この公権力こそまさに桜田が述べた警察、裁判所―一九七〇年代には「自衛隊は軍隊」などとはいえなかった！しかし、今では環境は様変わりした！それに中央から地方まで行政区単位に隅ずみにまで張りめぐらされた官僚機構であり、これら公権力を維持するための徴税権である。

公権力と徴税権を直接、指揮監督するのが官吏・官僚で、官僚機構はいまや社会の機関として社会の上に立つ！

以下、こうした視点から、憲法とはなになんか、憲法改正か、を考えてみたい。

（編集部・つづく）

戦争とは何かを考える

― 平和を訴える ―

「若者」と戦争

現代日本では第二次世界大戦後、生まれ育った「戦争を知らない」世代が国民の過半数を占め、それとともに国家権力を動かすようになりましたね。小泉内閣の平均年齢は六十歳前後でしょうか。戦争を体験し、それゆえに戦争の残酷さ、悲惨さ、政治と軍隊を動かすことの恐ろしさを知っている中曽根、後藤田、宮沢といった老政治家は政界から排除されてしまいましたよね。それからというもの、日本は戦争への道をひたすら突き進んでいますよね。もっともこうした状況を作ったのは彼らなんですけど。

平和憲法による教育を受け、戦争を「知らない」世代がなぜ戦争政策にひた走るのでしょうか。みなさん、このことについてお考えになったことがありませんか。理由はいったって単純で、戦争を「知らない」ことにあるんですよ。こうした考えを検証するためいろんな書物を手にしてみたいです。書店に山積みされた新刊本ではありません。数百年、読みつがれているいわゆる古典です。

私の考えを發展させてくれそうな小さな一冊の本に遭遇したのです。デジデリウス・エラスムスという一四六〇年代後半に生まれ、一五三〇年代半ばに没した神学者、古典学者、文明批評家として歴史に名を残した人が書いた『平和の訴え』です。彼が生きた時代は宗教革命の時代で、キリストの名においてヨーロッパ全土に戦争―宗教戦争―が吹き荒れた時代だったんですよ。カトリック教会にたいし、ドイツはルター、スイスでカルヴンが宗教改革を唱えるといったようにです。

ヨーロッパ全土は戦乱の炎に包まれました。こんな時、一五一七年にエラスムスは『平和の訴え』を発表したんですよ。当時は今のよう印刷技術は発展していません。本を出版すること自体がたいへんな一六―一七世紀になると三十二種類もの版が重ねられているというのですから驚きですよ。

エラスムスの論述

そうそう、エラスムスは「戦争と若者」についてどう言っているかでしたよね。こう言っているんです。

「戦争が問題となった時には、君主は若者たちを招いて諮問すべきではありません。若者たちは戦争がどんなにひどい災禍をもたらすかについて自ら体験がないため、戦争を愉しいものと思いがちですから、それにまた、公共の安寧秩序の攪乱によって利益を得、民衆の不幸を食い物にして私腹を肥やす連中も斥けなければなりません。

君主であるほどの者は、あれこれの好戦的な輩の気まぐれにつられて、無謀な戦争を起こしてはなりません。と申しますのも、戦争は一たび始まってしまったようならば、容易なことではおいそれと終わらないものだからです」

エラスムスの生きた時代は現代のような民主共和制、議会制民主主義の時代ではありませんよ。だから「君主」という言葉を形式的に大統領国家のアメリカではブッシュ君、議会制民主主義のわが国では小泉君と読み変えることが必要になりますね。「若者」とは現代にあつては戦争を「知らない」自民、民主の国会議員たち、「民衆の不幸を食い物として私腹を肥やす連中」とは、貧困に巢喰う国際官僚、戦争を業（なりわい）とする武器商人、戦争で諸施設を壊しておいて、やれ復興だ、人道援助だと大騒ぎする大企業の連中です。しかし、政治家、大企業のボスたちは徒手空拳で戦争地帯に行くことはまずありません。「人質事件」でいえば、なんとかいう副大臣は安全地帯に身を置いて「指揮」しているというようにですね。戦争の犠牲になるのはつねに善良な市民ばかりなんですよ。イラクで捕らえられ十六日解放された三人の若者たちはまさにそうですね。彼らは「劣化ウラン弾の被害を訴えたい」、「戦争孤児を助けたい」、「戦場カメラマンと生きたい」との社会正義実現を志し、行動していらつしやるのですよ。こうした人びとを戦争は不幸に追いやってしまうのです。戦争は敵をせん滅することなんです。近代戦争の戦略家クラウゼヴィッツは未完の大著『戦争論』でくどいまでにそのことをくり返しているんですよ。幸いにして彼らは解放されました。イラクの友人であることが理解されたからなのでしよう。

くり返される過ち

人間って何度同じ過ちをくり返すんでしょうね。ブッシュは言います。イラク、イスラムをやっつけることによって自由と民主主義の帝国は拡張されるのだ、と。なんとまあ呆れた言い草でしょう！ イスラムにキリスト教文明を移植しなければ世界のためにならないとは！

こういう連中のふるまいときたら、その残忍性は野獣をも凌駕しているという以外、他に言いようがあるのでしょいか。よくジャングルの掟といわれますよね。しかし、それは食物連鎖という自然の法則そのものでしょう。肉食獣は草食獣を喰い、草食獣は草を喰らう。連鎖をくわしく記し始めれば切りがありませんよね。しかし、どんな巨獣、野獣であれ、異種族との闘争以外には「戦争」はしませんよね。しかも、こうした動物たちが相手とたたかう時には、自然から与えられた武器を使うのです。ところが人間は、道具を使うこと

に端を発し、地獄の兵器を使って撃ちかかっているのです。

現代のイラク戦争でいえば、アメリカ軍は最新のありとあらゆる兵器で武装しています。それは毎日のテレビ画面で映し出されていますよね。それにたいし、イラクの人びとの兵器はといえば、せいぜいロケット弾と機関銃くらいのものでしょうか。これじゃ、戦にはなりませんから、イラクの「抗米」の人びとは創意工夫し、アメリカの弱点に食らいつく他勝ち目はないんですよ。人類に戦争が発生してからの伝統であるゲリラ戦という抵抗闘争なんです。ね。「人質」問題もこの一環というのが、戦場での「正常」なたたかいかい方となります。だって、誰が敵か味方が「捕らえて」みなければわからないんですよ。とりわけ、敵対国の「人間らしい」と判断されれば、危険はいや増さずにはおきません。

拉致問題だってそうです。一般市民を拉致して、プラスになることは常識的には考えられませんが、しかし、「戦時」という異常な精神が、まったく必要ないことを、さも必要であるかのように行わせしめるのです。三人の人質問題も根っ子は「戦争」です。「戦争」という異常な事態の犠牲者なのです。これら犠牲者をつくつたのが、日本政府の戦争政策なんですよ。古今東西、人間はなぜ、自分たちを害ねるために、より多くの知恵を働かせるのでしょうか？ どうして善よりも悪に目をつけるのでしょうか？

戦争は世界をまきこむ

商取引について少し考えてみてください。そこではたいして考え深くない者でさえ、商売の取り引きを始める前には、事の軽重を計り、熟考し、注意深くすべてを検討しますよね。ところが、こと戦争になると、盲目的に猪突猛進して、戦争というものは、一度その火蓋（ひぶた）がきられてしまうと阻止できないものだということを考えようともしません。戦火の嵐は、一つの相手に激しく吹きつけるだけでは収まらず、いよいよ荒れ狂ってついには世界全体の民衆をまきこんでしまうものなのです。

現にブッシュの戦争がそういう事態をもたらしてしまつたんですよ。「テロをなくす」と、アフガン、イラクに攻めこんで約三年たちましたよね。「テロ」は根絶されたんですよ。そうじゃありませんよね。世界に拡大の一方で、アメリカが攻めこんだアフガン、スタンやイラクでは全土をまきこむ大戦争になり、その余波は広がる一方ですよ。この日本でもそうでしょう。主要駅には警視庁機動隊との腕章をした警察が踏み台上がり、乗降客を威圧していますし、国会前では公務執行妨害者を取りおさえようとの警察官がやはり請願者を威圧しています。日本にもいつの間にか、「対テロ」という戦争がおこなわれているんですよ。

軍は侵略、人殺し育成機関

戦争というものは、第一級の悪者どもがのさばり出て、わが者顔に国の采配を振るうのですよ。平和な時代ならはりつけにされるにちがいない人間どもが、いざ合戦となると赫づくたる武勇を発揮するのです。羊腸たる山道を巧みに軍をすすめるわざにかけて訓練された特殊部隊、海兵隊に勝る者がだれかいるでしょうか。家宅侵入、必殺の技に対抗できる者が彼ら以外にいますでしょうか。軍とは侵略、人殺しの育成機関です。それが「人道援助」ですって？ 「自由と民主主義」の宣伝隊ですって？

不幸にも「人質」とされた三人の若者たちは、まさに人道援助のためにイラクに駆け参

じた英雄です。聖書でいえば、『出エジプト記』にある現代のモーゼです。そのモーゼと兄弟たちが苦しんでいるのですよ。これは小泉がアメリカの意をくんでイラクに出兵したからに他ならないんですよ。その小泉は「撤兵はしない」、「アメリカに支援求める」というんですから、これではアメリカを侵略者とし、「反米」の抵抗闘争に命をかけているイラク人民を刺激するだけなのですよ。小泉には三人の生命を救う気持ちなどさらさらなかったのですよ。

戦争加担でえるものは

ところで戦争政策に加担してなにか得るところはあるのでしょうか。もうすでになにも得るものがないことは明らかですよ。テロとは無縁だった日本に「テロ」という得体の知れぬ恐怖が拡散され、あのサリン事件直後のように、ゴミ箱がすべて撤去されてしまっていますよね。企業論理からすれば、これぞムダの排除、節約で願ったりかなったりなんですよ。ですから、お上のお申し出には逆らいませんと、いうなりなんですよ。

たとえ、戦争がうまくいったとしましょう。それで私たちになにか得るところがありましようか。戦争が行われることによつてすべてのものにどの位の損害を及ぼすことになるか、また勝利のもたらす利益がどれほどになるのか、差し引き戦争に勝つということがどれほどの価値があるのかを考えてみましょう。戦争では、流血をみずに勝利を収められたい試しはありません。

アメリカ軍にはすでに公表されただけで七百人をこえる死者が出ていますよね。負傷者はその数倍に達しているにちがいありませんよね。米兵の戦死者は戦闘より車列の爆破なんですもの。写真を目にしますと、軍事車輛には数人の兵士が四方に銃をかまえていますよね。その車輛が爆発され、燃え上がるんですよ。無傷は運のいい兵士以外ありません。とすれば負傷者、野戦病院にかつぎ込まれてからの死亡者、あるいは恋人、新妻、妻や子を悲しませる人びとはその倍にも達するということなのです。

戦争の惨禍は直接の被害者にとどまりません。戦争国の国民が血まみれになることなんです。さらにかえて、公衆の風俗や規律の弛緩を計算に入れてみましょう。どんな利益もこの損害を埋めあわせることはできないのです。

(北条 一夫)

韓国総選挙で民主労働党が議席

韓国総選挙でスペイン同様、「革命」が起きた。旧い政党が敗北し、新しい政党・開かれたウリ党と労働運動・民主労総を支持母体とする民主労働党が勝利した。ウリ党は昨年、新千年民主党から分裂してつくられた党であり、民主労働党結成は〇〇年である。

韓国では今、労働運動が盛り上がっている。この労働運動の盛り上がりの中で、韓国政党史上はじめて左派として結成された民主労働党は〇二年六月の地方選で六%を得票し、同年十二月の大統領選では約百万票を獲得した。民主労働党は十人当選めざし選挙戦をたかかう声明を発し、彼らがめざした小選挙区二、比例区八の十名が当選し、大躍進したのである。

韓国労働運動は軍の独裁政権時代、官製の韓国労働組合総同盟（韓国労総）が支配しつづけてきた。一九八〇年「だめな幹部はやめてもらおう」、「労働運動は法律を守ることで

なく、新しい権利をつくり出す」とこと、民主労働組合総連盟（民主労総）を下からつくりだした。韓国労総と民主労総が競い合う現代の韓国労働運動の現状は組合員百四十万二千名、組織率一三・八％。民主労総は九九年十一月に合法化され今日にいたり、民主労総の構成は労働組合数八五四組合、組合員約六二万で、民間大企業組合に大きな影響力をもつ。民主労働党大躍進の背景である。

これにたいしウリ党は若者中心に支持を集めた。この背景にはノムヒョン大統領弾劾が野党ハンナラ、千年民主党の思惑と異なり国民に不評だったことがあった。こうして総選挙は、ノムヒョンを信任するのかどうかの信任投票となった。ウリ党が四九から一挙に一五二に議席をふやし、野党ハンナラ党は一三七から一二一議席へと後退。金大中前大統領の母体であり、ノムヒョン大統領の基盤でもあった千年民主党は前年の分裂で一一〇から六一議席に減っていたが、今回の選挙ではわずかに九議席へと解党状態となった。

韓国にも「二大政党」状況が出現したかである。ノムヒョンは内政では①景気回復、②失業対策、③税制改革で貧富の差解消をめざし、外交では①対北への太陽政策継続、②イラク増派、③日米韓の安保政策をめざす。

元氣の出る集会になつた！

―兵庫から労働組合を作りなあす―

兵庫の闘う労働組合が、集まって、「兵庫たたかう仲間の三・一三集会」が、一時三分から、神戸中央港湾福祉センターで開かれ、二〇〇人のたたかう仲間が集まった。

集会は、武庫川ユニオン音楽隊の「鉄の労働者」「岩のように」の演奏が始まり、酒井浩二尼崎地区労議長のあいさつ、小西武庫川ユニオン書記長の基調提案（別稿、十五頁以下を参照）が行われた。

二百人の二百の闘い 集会には、二〇〇人の二〇〇の闘いが集まったが、次の仲間から報告が続いた。分会それぞれの報告があかしユニオンから。兵庫県職、鉄建公団訴訟を軸にJRと闘い続ける国労闘争団、裁判闘争を闘っているメンバーを中心に報告のあった神戸ワーカーズユニオン、稲美町職、本四海峡バス争議、タクシーの組合結成の全港湾神戸支部、ゆうメイトの解雇撤回を闘った全通と続いた。武庫川ユニオンが最後に構成詩劇「弥生ヶ丘斎場物語」を発表して集会を終えた。

集会に続いて、会場からデモに出発。フロリススト争議のホテルオオクラ前、本四海峡バス争議の海員組合前をシュプレヒーコールでデモ。大丸前で解散した。面白く、楽しく、元氣のである集会、デモだった。

武庫川ユニオンは、音楽隊の演奏と「弥生ヶ丘斎場」の組合結成とストライキを背景にした一時金闘争を構成詩劇で発表した。音楽隊は、結成して一年に満たないが、もう堂々とした演奏を披露するまでに定着してきた。（ギター鳥羽、虫明、キーボード福家、合唱飯田、小西、夏川、野口、虫明（女）、大橋、上山、小西（女））が出演。神戸ワーカーズユニオンの面々が、振りをつけて盛り上げてくれた。

構成詩劇は、三〇人の組合員全員が舞台上上がり、分かりやすい発表が出来たと自賛している。構成詩劇は、飯田政志さんの原作に、小西純一郎が脚色した。民間請負になつた

弥生ヶ丘斎場の労働条件の悪さにユニオンへ加入、分会結成とすすんだ斎場労働者の初めての闘いで、しかもストライキを決意しての闘いに進んでいった経過を劇にした。

主演 飯田政志の感想「これが団結やつ！」 今日は一日めちやくちや楽しかったです。今日の詩劇は大成功でしたね！ 僕がしどろもどろで書いた台本（作文？）にあれだけたくさんの人が協力してくださったことが本当に嬉しくて嬉しくて、「これが団結やつ！」っていい意味の寒気（武者震いだろつ）がしました。これは謙遜ではありませんが、僕が活躍したのではなく武庫川ユニオンの力を結集した結果が今日の詩劇の成功という形になって表れたんだと思っています。

小西さんの脚色もよかった、西垣さんの日本管財はやっぱりピカイチだった、虫さんの演技力が西垣さんに迫っていた、幸元さんの出トチリが逆に笑いを誘った、山中さんが常に僕にカブっていて客席から見たら僕が隠れていた…、鳥羽さんが自分の台詞を暗記していてくれてた、僕の知らない間に備品がすっかり段取りされていた、ふーみ…上山委員長は今日もかわいかった。

そしてなによりも、せりふを噛もうがトチろうがお客さんが優しく見守ってくれた。感謝すべきところを捜そうと思えばいくらでも出てきます。本当に今日はいい思い出になりそうです。弥生の仲間が来られなかったのが残念で仕方ないです。演技指導をする力はまだ僕にはありませんが、機会があればまたせひユニオンで芝居がしたいですね！

デモ行進も楽しかったですねえ。「もつともつとみんな大きな声だしてよっ」っていう不満が少し残りましたが、一人や二人の仲間のために何百人と言う人間が動くというシチュエーションがすごく大好きです。
(武庫川ユニオン)

誌代値上げのお願い

社会通信が月額購読料（送料ふくむ）を六百円にしましたのは、一九九四年五月一日号（第五六九号）でした。それから本号発行（第九〇〇号）までの十年間、読者の力強いお力添えで定価をすえおいてまいりました。

読者諸氏もご存知のことと思いますが、政府は消費税の実質値上げ方策として、売り上げ一千万円以上について五％課税を強行し、それが本年四月から実行されることになりました。あと三年ちかくで一〇〇〇号という記念すべき号を迎えることになるだけに、内部努力で経費削減をはかってまいりましたが、活字離れと相まって現状は社会通信にとつてたいへん厳しいものがあります。したがって、誠に不本意ではありますが、八月一日から左記のように購読料を改訂させていただきたく存じます。

ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

記

『旬刊社会通信』（月三回発行）誌代一ヶ月、現行六百円を、二〇〇四年八月一日発行分から月額七百円に（六ヶ月分三千六百円を四千二百円に）。

六ヶ月前納制のお願いは従前どおり。これまでの前納分は七月末で再計算させていただきます。明細を八月一日号発送の際請求書として、ご一報させていただきます。

兵庫の「労働者大会」へ

—労働運動をめぐる情勢と課題—

一、憲法の危機

二〇〇四年は、戦後日本の歩みの中で大きな岐路となる年となった。戦争放棄・戦力不保持・交戦権の否認を掲げた憲法九条を持つ日本が、アメリカのイラク侵略戦争に同盟軍として参戦に踏み切ったのである。

戦後の平和憲法はなし崩し改憲の攻撃にさらされ続けてきた。しかし、憲法九条を持つがゆえに、日本は六〇年間近くどのような戦争にも加わることはなかった。自衛隊は存在したが、一人の人間も戦争で殺すことはなかった。しかし小泉自・公政権はついに『ルビコンの河』を渡ってしまった。そして、次に狙われているのは、憲法そのものの変えることだ。政府がめざす憲法改正の国民投票は、有効投票の過半数で成立する。

平和の危機とともに、働く人々の生活の危機が押し寄せている。憲法二五条の「国民の生存権」が侵され、国の社会保障の義務がないがしろにされている。五年連続三万人を超える自殺者。首切り自由の社会をめざす財界の意向のなかで、リストラ・解雇が吹き荒れている。完全失業者は三〇〇万人を超えている。しかし実質的な失業者はゆうに一〇〇〇万人を超え、実際の失業率は一〇%を超えている。とりわけ未来の社会を担うべき青年層の失業率が際だつて高くなっている。すでに、職も家も失ったホームレスが増大し、三万人とも言われている。

「すべて国民は勤労の権利と義務を有する」という憲法二七条も空文化しているのだ。

これらの現実には、この国が国民に最低限の生活を保障することを放棄していることを示している。新自由主義路線を信奉する国の指導者たちは、規制緩和、構造改革と称しつつ、政策として、弱肉強食、弱者切り捨ての政策を推し進めているからに他ならない。

二、労働法制の大改悪

二〇〇四年一月から改正労働基準法が施行された。三年・五年の有期雇用を認め、三年で首切り自由の社会を目指している。裁量労働制が緩和され、残業手当も支払われない仮借無き長時間労働を押しつけようとしている。この三月からは製造現場への労働者派遣が解禁された。正規雇用から派遣などの非正規雇用が飛躍的に拡大していくことになる。

財界はこれでも満足していない。今日の労働基準法に解雇の自由と、不当解雇と認定された場合の金銭解決をめざしている。そしてその次の狙いが、労働者の抵抗の手段である労働組合法だ。すでに国労一〇四七人の不当解雇問題で、労働委員会の命令がことごとく最高裁によって切り捨てられた。

三、ますます拡大する格差社会

「賃金三〇〇万円時代」という言葉が流布されている。いま正社員として仕事に就いている人々にも賃下げの不安が広がっていることを示している。事実、正社員で三〇〇万円というのが特別のことではなくなってきた。NTTで強行された、五〇歳で定年制。再雇

用は二〇%から三〇%減という攻撃が、全ての業種でも形を変えて強行されている。分社化を強行し、賃金は三〇%〜四〇%減額され、まさに三〇〇万円水準に落とし込まれている。長時間労働のタクシー労働者は二〇〇万円すら確保できない最低賃金水準が広がっている。

自治体でのアウトソーシング、民間への払い下げが進み、低賃金労働者に取って代われようとしている。篠山市の「株式会社プロビス」(プロフェッショナルサービス)は、自治体嘱託職員を年収二〇〇万円低賃金労働者に置きかえている。

「勝ち組」「負け組」という言葉が広がっている。しかし勝ち組労働者に待ち受けているのは、非人間的な長時間労働である。一定額の賃金保証と引き替えに、「二四時間・週七日労働」を強いられる労働者が増大している。アメリカのホワイトカラー労働者の実態のルポである『窒息するオフィス』には、「休まる時間は、地下鉄に乗っている時だけ」という勝ち組労働者の告発が報告されている。これはアメリカの問題ではなく、日本でも同様である。職がない失業者が溢れる社会で、働き過ぎの労働者が拡大するという異常な社会が生まれている。

低賃金と雇用不安に脅える労働者群と、史上空前の利益を上げている大企業が存在し、濡れ手に粟の報酬を得ている経営者集団が存在しているという事実を忘れてはならない。「階級社会」が見事につくられている。

四、労働組合の責任か問われている

産業革命を経て資本主義社会が出現し、発展してきた。かつて最低限の生活と長時間労働を押しつけられてきた労働者は弾圧の中から労働組合を組織し、闘いの中から労働法を制定させ、雇用と権利を勝ち取ってきた。

いま我々の目の前に広がるようにしている社会は、新自由主義という市場原理主義の競争至上主義の社会である。資本から労働者を守る規制(労働法)を骨抜きにして、労働者を全ての商品と同様に競争のなかに投げ出す社会がめざされている。しかし、過去と現代は大きく異なる。それは、資本のグローバル化だ。資本に国境はない。彼らにとつて、人種や国籍などは関係がない。求めているのは低賃金の従順な労働者である。

こうした攻撃に、世界の労働者たちは「反グローバルイズム」「新自由主義反対」を掲げ、反撃に立ち上がりつつある。韓国では、一九八七年に民主的労働組合の合法化を勝ち取り、一九九五年にたたかうナショナルセンター・民主労働組合総連盟(民主労総)を創り上げた。そして、いまも毎日果敢なたたかいを展開している。兵庫からもこの間多くの労働者が、韓国の労働者大会に参加した。厳しい労働者弾圧に屈しない、不屈のたたかいにふれてきた。

アメリカでも、AFL-CIOのジョン・スウィニー会長を中心に労働組合の組織化、底辺労働者の権利擁護を掲げたたたかいが広がっている。

ドイツをはじめヨーロッパの国々でも、「アメリカ型」ではない働く者が大切にされる福祉社会を守り抜こうと闘いを進めている。

一方、日本の現実はどうか。大手の労働組合は、大企業集団が史上空前の利益を上げていくにも拘わらず、二〇〇四年春闘でも賃金要求すら放棄した。能力給が広がり、個人契

約の年俸制度への移行が容認されようとしている。労働組合はリストラ・解雇に抵抗の術を失い、まさに企業の補完勢力と化そうとしている。大量解雇・賃下げにストライキすら提起されないという事態は労働組合が窒息死寸前であることを現している。

五、地域から反撃を開始しよう

労働組合組織率は一九・六%となり、ついに二〇%を割り込んでしまった。働く者の未来を切り開くためには、新自由主義に対決するには、働く者を労働組合に組織化することが待ったなしの課題となっている。正規労働者から非正規労働者へ、雇用構造が急転換している今日、非正規労働者の組織化戦略の確立が急がなければならない。

この一年間、私たちのまわりでも、新たに労働組合に加入した仲間がいる。そして、彼ら彼女たちは、それぞれの労働組合活動に参加する中で働く者としての連帯を広げ、団結することの喜びを知った。

労働組合の組織化は組合役員だけの任務ではないはずだ。働く者全体に襲いかかる攻撃に反撃するには、組合員一人ひとりが組織する側に立つことが求められている。組合員一人ひとりが組織者になることが、多くの未組織労働者との接点を増やすことになる。

全港湾本四海峡バス分会、自治労臨時職員の仲間、地域ユニオンの仲間、たたかひの炎は燃え上がっている。こうした一つひとつの闘いの火を集め、大きく拡大していきたい。今はまだ闘うことに躊躇している多くの仲間に、労働組合に結集してたたかうことで展望を切り開けること、そしてたたかひは楽しいことを広げていきたい。嵐の中で炎を燃え上がらせ広げていく。私たちはそうした情勢の中に立たされているのだ。

六、兵庫たたかう仲間の集いを兵庫の労働者大会に

私たちは、二〇〇二年に初めて「兵庫たたかう仲間の集会」を呼びかけた。参加者は、これまでの集会とは違う空気を感じた。そして二〇〇三年、二年間の集いは、たたかえば前進することができることを確認した。恵泉寮の仲間は一三年にわたる粘り強いたたかひの中で完全勝利を果たした。集会終了後、神戸ワーカーズユニオンオークラ神戸フロアスト分会、全港湾本四海峡バスの闘いに連帯し、抗議行動を展開した。抗議行動など実践の場に参加する機会のない仲間は、「面白かった」と応えた。

私たちは、過去二年間の成果に立って、労働運動の再生をめざす集会を成功させたい。私たちは、参加者一人ひとりが今日の集会に参加して良かったと思ひ、明日からのたたかひの力を感じられる集会にしたい。みんなで創り上げる集会にしていこう。

韓国では、毎年一月に労働者大会が開かれている。昨年はソウル市庁舎前広場を五万人の労働者が埋めつくし、「新自由主義に反対！ 非正規労働者の権利確立！ 労働者弾圧反対！ イラク戦争反対！」を叫んだ。

私たちは兵庫における労働者大会をめざしたい。私たちは今はまだ小さいが、大きな志を持ち、日本労働運動の再生を兵庫から発信していこう。今日の集会をそのような集会として、成功を勝ち取ろう。本日の集会のスローガンをみんなで確認しよう。そして学んだことを参加者一人一人が、それぞれの地域で、一年間力を尽くして実践していこう。闘いを通じた交流と連帯行動を積み上げ、来年更に大きく更に深く交流し合う事を誓いあおう。

◇ 読者からのおたより ◇

古代ローマの美術展 この頃、のぞみ、の回数券しかなく、早く着いてしまい、上野の国立西洋美術館まで行ってバチカン美術館所蔵の古代ローマ美術にふれ、彫刻展を楽しんできました。その後の会議との落差が激しすぎたのですが、しばし、ローマ帝国の盛衰に思いを致してきました。ユリウス・カエサルの肖像にはすぐくひかれるものがありました。独裁者なりにインパクトがあるということでしょうか。しかし、最後は暗殺されてしまったようです。「この肖像に表された容貌はその所蔵先から『キアラモンティ形式』と呼ばれ、偉大な人物の生前を知るさすがにはなるが、かなりの理想化が施されている」とのことです。奴隷で解放された夫婦が小さな子どもを失って悲しむ三人の浮彫などは東洋的な趣もある印象深いものでした。(しが・I)

編集部より 竜君の元気な写真と作文に妻は大感激。さらに、美術展にかんしては「あなたとは趣味が違うわね。少し見習いなさい」って。とは我がつれ合いの言葉です。

N関労に連帯 NTTの企業年金改悪に反対し闘うNTT関連労組が、闘いを広げることを目的に、ビラの配布事業を増やし、三月八、十六日の八日間にわたり七事業所で行われ、熟年者ユニオンも参加。波紋が広がり始めたのか、神戸南・大会の事業所で管理職等が「お前ら邪魔や」と怒鳴り散らす場面も。(神戸・熟年者ユニオン)

編集部より サンドイッチマン・デモも発展のようですね、さらにはがんばって！

コスト切り下げ いつもお世話になってます。分かりづらい機関紙をFAXしてスイマセン。公社化になり、郵便の黒字達成のための「アクションプラン」(一万七千人減らし)が打ち出され、そのひとつである、運送部門のコスト削減が行われています。鹿児島では輸送会社(八〇名ほど)が入札によって六割の路線をうばわれ、廃業届を出すなど、雇用が奪われているそうです。集配の委託もいろいろ種類があつて(速達専門、小包専門、山間地専門など)、それらの人たちの委託料を下げたり、非常勤におきかえるなどしてコストを削減してきています。今回、法的に自家用車になり、自前で車を用意することとなると、ただでさえ一人当たり約三〇%も委託料を下げられた直後のため、働きつづけることがとても困難な状況になりました。それも、説明されたのが二月末。首を切るのに「一ヶ月前説明」というスケジュールあり「あした返事をしろ」と！(郵政労働者・S)

編集部より トヨタのやり方そのものです！

二項目確認書 支部合理化は、二項目を巡って暗礁に乗り上げていました。①工務、電気職場の徹夜勤務シフト見直し、②駅務職場の三〇駅嘱託化です。電車支部として、双方を受け入れることは働く者の立場から絶対に受け入れる事はできないと主張してきました。一方、会社は三月五日の組合からの賃金要求説明時に「環境整備」をあえて主張してきました。いわゆる「支部合理化の解決なしに賃上げ回答はできない」という恫喝をかけてきたのです。支部は、職場間での意思統一を重ね、断続的な事務折衝をしてきました。その中で、本日(二八日)「確認書」を取り交わし、当面の支部合理化の進め方を確認しました。本部の賃上げ交渉は、一定の環境整備ができたことで、鉄道部門の賃上げ回答が示されました。賃上げについては、業績トップの京王と同額の五四〇〇円、臨時給は昨年同月数の五・三八ヶ月です。バスについては厳しさを増しています。賃上げ一律一〇〇〇円。臨時給はバス分離確認の大綱合意五ヶ月。(第三次電車支部人減らし合理化粉砕壁新聞・No.14)

資料送ります 毎日ご苦勞様でございます。私達三池CO被災者は本年より毎月ニュース発行を方針にかかげ実行しております。この度、大牟田被災病院統廃合問題について、最近の行動を記事にしながら頑張っております。お読み頂ければ幸いに思います。担当は私とO氏で行っております。よろしく願います。(荒尾市・S)

編集部より お送りいただいた資料、拝読いたしました。労災病院統廃合問題は編集ノートにもモっておりますが、こんなかたちで問題が現れているとは。

連帯の手紙 八九九号に「書評」(というよりPR)を載せて下さる由、増田さんもさ喜ぶことでしょう。(少しでも売ればいいなあと思っております!)。貴誌は、労働運動を核とする情報・激励・連帯の稀誌ですので、多くの文が掲載されるとは限らないのは当然。拙稿は幅広い領域で、体制批判をチクリとやっております、その広さは映画、演劇、教育、歴史……にまで及んでいるからです。まあ、雑感文が田舎(ちほう)から来たというぐらいに(連帯の手紙)と思っております。四/二四を楽しみに！(茨城・M)

編集部より 「連帯の手紙」に安堵と感謝としております。増田さんとはあちこちで顔を合わせています。四月二四日楽しみます。